



錦絵『伊賀越道中双六第六』 歌川國員画、中村芳丸彫
大阪心齋橋塩町綿屋善兵衛板

通巻237号で紹介した伊賀越道中双六第六沼津の段と同じ場面を描いた錦絵の作品を紹介します。

右上隅に場面の説明、「平作は印籠を敵の手がかりと跡を追ひ、松原にて親子名乗あひ敵の行衛をしる」とあり、千本松原にて平作が呉服屋十兵衛から敵の行方を聞き出そうとする姿と、それを陰から見ていて飛び出そうとするお米とそれを止める孫八が描かれています。平作の左後ろには高い石柱に乗せられた地蔵の石仏もあります。

作者の歌川國員は、大阪の人で、一珠齋とも号し、三代目歌川豊国(歌川国貞)の門人ともいわれ、幕末に活躍しました。「伊賀越道中双六第六」として平作が十兵衛の荷物を担がせてもらう棒鼻の場面の作品もあります。

沼津に所縁のある歌舞伎役者として、「沼津の段」の呉服屋十兵衛を演じた美男子で知られた十五代目市村羽左衛門がいます。

右下の絵葉書写真は、明治44年(1911)4月に歌舞伎座で上演された二番目の演目の伊賀越道中双六第六沼津の段の第一場、沼津棒鼻の様子を撮影したもので



絵葉書『二番目(伊賀越道中双六) 歌舞伎座』

上方屋製 消印明治44年

配役は右からお米の5代目^{なかむらし かん}中村芝翫、平作の11代目^{かた}片岡に^{おかに}ぎえもん、岡仁左衛門、呉服屋十兵衛の15代目^{いちむらう}市村羽左衛門です。

中村羽左衛門は、下香貫山宮前の牛臥山南裾の埋立地に三島宿の旧本陣職世古六太夫直道が創設した海水浴場旅館三島館の一面を借り受け、別荘を構えていました。その向いには実業家として知られる^{ふじやまらいた}藤山雷太(駿豆鉄道(株)の社長も歴任)の別荘もありました。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話
川口組の巾着網（旋網）漁…その1

川口さんからご寄贈頂いた『巾着規約書』の帳簿に含まれる大正12年（1923）の「川口巾着網機具台帳」には、「巾着網」が含まれており、この当時、すでに巾着網（旋網）漁を行っていた網組だったことが分かります。川口さんが川口組に入った昭和37年（1962）頃も、巾着網漁が川口組の主要な漁でした。

巾着網漁は、魚群を取り囲むと網の底を“巾着袋”の口のようにすばめることで塞ぎ、魚の逃げ道をなくしてから船に引き上げていくことから“巾着”の名がつけられています。川口組で行っていた巾着網漁は2艘の船で行うため2艘巻とも呼ばれます。これは1枚の巾着網を2艘の船に分けて積んでおき、魚群を発見すれば2艘の船から網を海中に落としつつ魚群を取り囲むことにちなみます。川口組の最晩年には1艘に網を積み、1艘で巾着網漁を行うようになりますが、これは1艘巻と呼ばれています。川口さんが川口組で漁を始めた頃は、春から夏にかけてのカタクチ（カタクチイワシ）を捕るための巾着網漁、夏のカツオやマグロを捕るための巾着網漁、秋口からのアジやサバを捕るための巾着網漁と、魚種によって網目の大きさが違う3種類の巾着網を切り替えて漁を行っていました。冬に入ると巾着網漁による漁獲が落ちるので、魚が来た時をのぞいて網組による漁は休止となります。

●カタクチを捕る巾着網漁

カタクチは体長14cm前後の小型のイワシです。静浦地区の主要な産業であった煮干し製造の原料として用いられていましたが、川口さんが漁を始めた頃は、カツオの一本釣漁のための生餌としての用途として売買されることが主でした。当時は、初夏に太平洋を北上するカツオを追いかけながら釣り上げる鹿児島県や高知県などのカツオ釣船が静浦地区へ餌となるカタクチイワシを求めて多く訪れていました。

船団の構成は、巾着網で魚群を取り囲むアミフネ（網船）が2艘、ギョタン（魚群探知機）を装備して海中の魚群を探るタンサクセン（探索船、ギョタンセンとも）が2艘、集魚灯を装備して灯りを灯して魚を集めるヒブネ（灯船）が2艘の計6艘となります。

カタクチを捕る巾着網漁は夜間の漁になります。漁師は夕方ごろに集まり、漁場に向かいます。カタクチは沿岸にすることが多く、富士川の近辺から伊豆の仁科までの沿岸が漁場となっていました。タンサクセンとヒブネ1艘ずつが組となり、2組がアミフネに先行して別々の場所で魚群を探しに行きます。タンサクセンには、ギョタンシ（魚探士）が乗っており、魚群探

知機に映る映像から漁獲量の予測を立て、漁を行うかどうかの判断を行います。過去の漁における魚群探知機の映像とその時の漁獲量という実績の積み重ねが判断基準となるため、ギョタンシには経験豊富な漁師が選ばれます。ギョタンシが魚群探知機から魚群を確認し漁を行う判断を下すと、2艘のアミフネを呼びます。アミフネが来ると魚群の上でヒブネが海中で集魚灯を灯して魚群を集めます。アミフネは、魚群を取り囲むように巾着網を落としてから巾着袋の口紐にあたる環網を締め、底を塞いでいきます。この時、ヒブネは灯りを消して巾着網の外へ出ていきます。環網を締め切ると2艘のアミフネから巾着網を引き上げて、魚群を取り囲んだ範囲を狭く、そして浅くしていきます。

カツオ釣りの生餌となるカタクチはエサヤ（餌屋）と呼ばれたカタクチをカツオ釣船へ売る仲買業者へ売られます。生きた状態のカタクチが求められるため、捕ったカタクチを生きたまま商人の元へ届けなければなりません。生きたままカタクチを運搬するための組み立て式の生簀がエサヤから貸与されており、カタクチを捕らえると生簀を海中に投げて組み立てます。組み立てた生簀を巾着網の横につけ、生簀の口と巾着網の口を繋げてカタクチを生簀の方へ移していきます。移し終われば生簀の口を締め、巾着網はアミフネに積みなおして次の漁への準備をします。生簀はその場でエサヤへ引き渡されることもありますが、自分たちでエサヤから指定された場所まで運ぶこともあります。運ぶ場合はタンサクセンの船尾に生簀を結んで引っ張ることになりますが、スピードを出すとカタクチが死んでしまうので、ゆっくりと運ばなければなりません。1日に3回ほどの巾着網漁を繰り返し、夜が明けた頃に漁を終えます。

カタクチを捕る巾着網漁は、静浦地区で盛んに行われていましたが、昭和50年（1975）頃からカタクチの漁獲が減少したため漁が成り立たなくなり、エサヤや煮干し製造といったカタクチに関連する産業も大きな曲がり角を迎えました。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



写真：ヒブネとして使われた川口氏の弥助丸
（写真提供：川口洋司氏）

■香貫・我入道編 その12 香貫の補遺①

今回の香貫・我入道シリーズを閉じていく上で、落ち穂拾いながらも触れる事の出来なかった地名や事柄等を、締め括りの内容として記録にとどめたい。

●**村境の地名とショージ** 村外れの集落の境界に見える地名として、境・榜示(棒杭)・塞ノ神・石神・障子・銭神・浜井場・的場がある。地名には観念的なもの、根源的なものが潜んでおり、民間信仰に関する小地名から、村境から入って来る悪霊や厄神、外敵の侵入を除くためのものに分かれる。姿・形が見えずに畏怖の念を与えるもの、心に思い浮かべられる外的対象の「表象」、心象・イメージがその背景にある。

「ショージ」に対する事例をここで挙げる。細流と捉え、シミツ・ショウツ(清水)の転訛とする説、尖峰を障子に見立てた説、ソウズを象頭の形状に見立てた説、荘園の管理に従事した荘司に因む説などがある。

上・下香貫の大字境として堤(土手)が強調された元禄期の上香貫村絵図があり、すでに内膳堀が築かれて榜示杭も打たれた頃である。安永6年(1777)の「村明細帳」には「しやうじ河土手」が狩野川除けとして記され、補修を重ねた土手と共に、障子川もすでに成立している。

弘化4年(1847)の「四ヶ村絵図面」でも内膳堀である下香貫用水を「障子川」と呼び、下香貫分に「字障子川」が記されている。用水の分岐点の淡島神社の地には、ショージの語源の「石神(障子)」か道祖神が置かれたと推定される。すでに元禄期の「村絵図」では堤の延長部分の北側、道の分去れ(追分・辻)へ「石地藏」が描かれており、塞ノ神として祀られている。

「障子川土手」の堤は狩野川の洪水防御の目的で、本堤が切れた際の「控え堤」である。土手で守られた田地に対して、善太夫新田に向かう疎水は並行に流れ、さらに楊原神社前から南側の直路沿いと中央部の3派に分かれ、下香貫分の字障子川と善太夫新田全域の田地とを潤していた。その後、上香貫の小字である中障子(後の中住町)に対し、上と下に字障子川は分かれ、さらに川が省略されて昭和初期に上障子・下障子となった。

在地土豪との関係で地名の「ショージ」について分布から検討すれば、霊山寺門前の字中障子は荘園を管理する荘司の居住からで、その田地が荘司給であり、字障子川の地に当たるか。特に中世に開発された「給田」の小字が字障子川の東側に隣接して存在し、領主が荘司に対して職務の報酬として与えた田地で、さらに障子川の流れは荘司に因む灌漑用水となる。このような結果からすると疎水の開削も含めて、開発そのものがより古くなり、植田内膳は近世になってから中世起源の水路等の再開発を進めた可能性が出て来た。

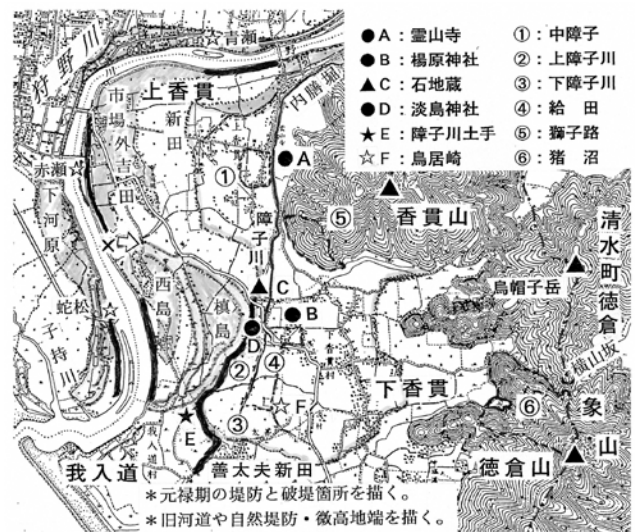
●**獅子路と穴人郷** 香貫地区の南東側に隣接した「静浦地区」、同じ駿東郡(旧駿河郡)の「志下」や「獅子浜」、「江浦」に関して、平安期の古代地名の「穴人郷」について触れる。承平年間(931~938)に成立した『和名類聚抄』東急本の訓は「之々比止」であるが、この「穴人郷」の地名に付会した説話がある。

日本武尊東征の時に上総ノ海に入水し、漂流後に弟橘姫命の屍が穴浜に打ち上げられたと言う伝説からとする説(『駿河志料』『駿河国新風土記』)である。獅子浜の吾妻社(吾妻権現)の祭神は「橘比咩命」であり、貞享2年(1685)の棟札が残る。漂着神の伝説と言える。後に特定の個人を穴人とする地名由来の説も登場するが、その根拠は薄い。史料的には天平10年(738)の『駿河国正税帳』に「穴人部身麻呂」の名があり、獣肉調理の品部の「穴人部」の居住からと考えられる。

シシヒト(穴人)は『和名類聚抄』掲載の駿河国駿河郡の郷名で、職業部(品部)の「穴人部」に由来する地名である。穴人部は狩猟により得た獣肉を調理して膳に供することに従事する品部で、穴膳を作る部民として「なますつくりべ」とも言った。これら部民制地名に対して、一方では自然地名起源の可能性もある。

上香貫字宮原の背後、香貫山南西麓の斜面に「獅子路」(シシジ)の小字がある。平安末期の経塚がある字播鉢山の南側の急斜面部である。類似地名であるシシチ(穴道)は「地形が次第に狭まっていく方向」を言ったものか。また「シシ」は鹿・猪などの棲息に関連する地名か。語源はシシ(肉)の意である。

自然地名としてのシシチ(獅子路)はシシ(縮) + チ(地)で「狭く縮んだような土地」を言ったか。シシの濁音化のシジでは、「狭小な谷間」とか「山と海に挟まれた狭小な平地」などに命名されたものが多い。また地名のシシは断崖と関連して、奇岩・怪石の高く突き出る様な地形に「獅子」と名付けたものか。なお



関係小字名とランドマーク

地元では一般的な解釈から、単に「獣道」の鹿か猪が通う道で、鹿路（猪路）から転じて獅子路になったものと説明されている。

また、下香貫地区には古くから知られた溜池の跡として「猪沼」がある。香貫小学校の南西側に位置し、イヌマ・イノヌマから沼沢地や湿地を指すものと理解して来たが、猪（イ）から「湿地」以外にキ（井）で「湧水のある汲み取る所」の意のほか、文字通りのイノシシ（猪）に因む地名もある。

香貫山や象山では今でも猪がよく出没する。猪沼の谷間には猪除けの石垣である「猪垣」「猪土手」の跡が残る。

さらに徳倉山北西山麓の緩斜面で、イヌマ（犬間）の転などの小平地と見られる可能性があり、字名の猪沼の地籍は背後の徳倉山中腹の平坦地である通称「平戸」側の斜面にまで広がる。その点から地名の「獅子路」と同様に、シシヒト（穴人）と関連付けられるか。

一方、市内の「獅子浜」は早くから郷名の「穴人」の遺称と目されて来た。後に獅子浜に転じたとするが、獅子浜では南部に奇岩の「獅子岩」、別名布島があり、江浦寄りの大久保山まで崖地が続く。シシ（肉）に類したイルカの捕獲は少なく、長い浜での漁獲物が多い

漁村で、狭小な平地からの命名の方が説得力を持つ。志下以南で多比・口野に至る静浦地区は、旧駿河国最南部で中世の「口野郷」、明治中期からの静浦村に重なる。平城宮出土の木簡から「宇良郷（宇羅郷）」が江浦湾一帯に、その下位の「榎浦里」が江浦付近、「菅浦里」が志下に比定出来る。しかし郷里に関しては別に「穴人郷」があって、両方の狭間に位置する獅子浜だけでは村落空間の狭小さ故に無理があり、また堅魚の貢進もなく結果的に内陸部へ求めざるを得ない。

複数の里の規模を想定可能な「郷」としては、鷺頭山から徳倉山の静浦山地北側に位置する地形など、内陸の大平・徳倉・日守の地域に可能だが、該当するかの確証は得られない。考古学面からは大平の丸山遺跡で出土した鹿の角の骨角器や猪などの獣骨から、弥生中期までの事例だが、背後の「里山」の豊かさを理解できる。

ただし小字の「獅子路」や「猪沼」を証左とするのは心許無いが、今の所「穴人郷」はほぼ香貫郷となるか。上香貫寄りを玉造（玉作）郷と仮定すれば、南側の下香貫・我入道一帯で「穴人郷」となるか。むしろ徳倉や大平寄りの方が中世以前を考えると整合性が強まるが、果してどうであろうか、後考を待つ。

資料館からのお知らせ

開館50周年記念の企画展

当館は、昭和48年12月に建物が竣工し、同年4月1日から設置条例により「沼津市歴史民俗資料陳列館」として設置、同日から職員が配置されて開館準備に着手し、同年12月1日に開館しており、本年12月1日をもって開館50周年を迎えます。

すでに内浦三津の旧内浦小学校への移転準備が進められていますが、50周年を節目として、今までの博物館の活動の中で、寄贈や寄託により館に収蔵されながらも展示公開する機会が少なかった、又は全くできなかった資料の中から、主なものを紹介する企画展の開催を予定しています。今まで目に触れることがほとんどなかった資料を今回公開します。



くすみ かつやまうじもとほんもつ
久住文書 葛山氏元判物

移転整備基本構想の策定完了

令和4・5年度に継続して委員会を設置し、策定を進めてきた当館の「移転整備基本構想」は昨年度10月に策定が完了し、年度末からは新たに委員会を設置して基本計画の策定を開始しています。

職員の人事異動について

4月1日付け人事異動で主査上野尚美が文化振興課文化財企画係に転出し、文化振興課から主幹鶴田晴徳と明治史料館から主任押野幸弘が転入しました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2024.6.25発行 Vol.49 No.1（通巻242号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp